

どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

安 井 猛*

Wie die Logotherapie in sich zurückgezogene
Kinder und junge Erwachsene heilen kann?

Takeshi Yasui

Immer mehr Kinder und junge Erwachsene in der heutigen japanischen Gesellschaft ziehen sich jahrelang – manchmal zehn oder sogar ziebzehn Jahre – von der Schule oder der Arbeitswelt zurück und kommen nicht wieder aus sich heraus. Der Autor beschreibt sieben Fälle im Alter von 16 bis 30 Jahren und postuliert elterliches Fehlverhalten gegenüber den Betroffenen. Das elterliche Verhalten könnte sich in dem Verhalten widerspiegeln, das die Kinder sich selbst gegenüber zeigen. Was tun die Schulen, Kommunen und die NPO-Hilfsorganisationen für die zurückgezogenen Kinder? Der Verfasser zeigt mit dem vorliegenden Aufsatz, welchen Beitrag die Logotherapie nach Viktor E. Frankl leisten kann, um die Kinder und die Jugendlichen in die Schulen bzw. die Gesellschaft zurückzuholen. Zu diesem Zweck stellt der Autor des Aufsatzes drei Methoden vor, die er nach den logotherapeutischen Prinzipien entwickelt hat.

Schlüsselwörter

Freiheit Verantwortung In-der-Welt-sein Sinnfindung Einstellungsänderung

1 ログセラピーにおける態度変容の仕組み

一定の生活の仕方が身につき、それがうっとうしくなる。変えたいと思う。いろいろ工夫するが、習慣になった生き方は変わらない。このような経験は男女、年齢、職業、職種、身分、貧富を問わず誰にでもあろう。染みついた習慣を変え、楽しく軽やかに生きることはまことに困難である。習慣といっても、それは様々であり、人間を苦しめる度合いも様々である。私は教員として不登校・ひきこもりの学生に注意を向けている。可能であれば、そのような学生に話しかける。話しかけは大抵無力である。彼らの欠席は常態となり、休学あるいは退学にいたる。これはショッキングである。さらに大学の外でもひきこもり問題と出会う。仙台市内のひきこもり傾向をもつ青少年が定期的に私のロゴセラピー研究所（Internet: www.logotherapie-japan.net）に通ってくる。療法関係にある青少年は現在、7名。目的は彼らの社会復帰あるいは進出（?）である。彼らの母親たちの一部は心理療法を受け、他の一部はグループ勉強会に参加する。この研究所でのひきこもり傾向を示す子供たちとの仕事は2007年9月から始まり、2008年8月末現在まで続いている。この論文において私はこの間の活動を報告しながら、ひきこもりの子供たちを外に出す技法を素描する。

* 総合人間科学部 人間心理学科

それではロゴセラピーとはどのような心理療法なのか？この療法の人間像によると、人間は生きる意味を意志し、それを実現しようとする。人生一般の意味ではなく、世界全体の存在の意味でもなく、ある特定の人間がある状況においてある具体的な意味を実現しようとする。人間は都度ある状況の中で生き、働くが、彼が実現すべき意味はこの状況の中に隠されている。それを見つけ、それを実現する。これがうまくいかないばあい人間は意味の欲求不満に陥る。生きる目標が立たない。何のために生きているか分からなくなる。意味の空虚が広がる。ロゴセラピーとはクライアントがこのような関連において生命の意味を見つけることを助ける心理療法のことである。

療法の創始者、ヴィクトール・フランクル（1905～1997）によると、人間が人生の意味を問うというのは僭越である。人間が人生の意味を問うのではなくて、実は人生そのもののほうが彼の人生の意味を問うのだという。人間は彼の人生のほうから彼に掛けられているこの問いに答えるにすぎない。フランクルはこの発想の転換を人生の問いのコペルニクスの転回と呼んだ。人間は人生からの問いに答える自由があり、そうする責任がある。この責任の取り方は身心の健康に影響する。人間には彼のその都度の状況に含まれる意味をそれとして指示する器官が組み込まれており、これが意味の直感を可能にする。フランクルはこの「意味の器官」を良心と名づけた。良心のお蔭で人間は意味喪失から意味充足へ転換できる。そのお蔭で一定の身心の病的状態を克服できる。各人は自らの責任においてある一定の身心の病的状態から身を背け、それから距離を取り、一定の身心の病的な自分を超越する。人間がこの自分を超越することはフランクルによると世の中で実現可能な意味を見つけ、それを実現できるようになることと1つに結びつく。ロゴセラピーにおいて態度変容というのはこの意味において世の中へはいつてゆく自己超越に他ならない。

人間は身体と心の統一として自己の病的な状態を超越するのであるが、この超越において役割を果たすのは身心の次元とは異なる精神の次元である。精神は「反抗力」を持ち、身心の状態を健康にし、この健康を保つために身心に介入する。うえに言及された自由、責任、良心、意味の直感、自己距離化そして自己超越そして世の中に出ること、これらすべてはフランクルのいう精神の能力である。これらの能力によって精神は身心の状態に反抗する。この反抗は機械的必然的に起こるのではなく、それには自由と意志が介在する。これにたいして二元的統一における身体と心の状態は必然的に「並行」する。身体と心の関係において心に起こることは必然的に身体に影響し、身体と心の関係において身体に起こることも同様に心に影響する。人間は精神の反抗によってその都度ある一定の状態にある身心の統一としての自己を超越し、世の中の何ものか、誰か、あるいはなんらかの理念に献身する。

このように私はロゴセラピーにおける態度変容が起こる枠構造を要約した。ロゴセラピーを適用することによってひきこもりが解決する場合、当該の子供たちにどのような技術あるいは方法が用いられることになるのかを明らかにしよう。ひきこもりの子供とその親たちの症状と原因と彼らの経歴と個性にしたがって方法を工夫するが、この工夫にロゴセラピー的な反省を加えることによって、どのような検証および反復可能な治療法が定着するだろうか？

2 子供たちと親たちの問題

ロゴセラピーの盛んなオーストリア、ドイツそしてスイスなどドイツ語圏の教育者たちは彼

安井：どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

らの国々の青少年について、彼らは「限界を知らない」、「放任され」、「機能化され」、「甘やかされる」傾向が顕著になりつつあることを指摘している。¹⁾ 私が関わるひきこもりの青少年たちは上記の国々の青少年と比較してどのような傾向を表わすだろう？ 彼らのひきこもりの現象形態は上記の国々の青少年と比較可能な傾向を指し示すだろうか？

A君は10年間、自分の部屋にひきこもり、風呂、トイレに行く以外、部屋から出ない。母、父、祖父と祖母、この子の2人の姉妹と1人の兄はこの子の顔を見たことはない。顔を見られそうになると背を向ける。(2年前母親は一瞬偶然にチラッと顔を見たことがあっただけだという) この24歳になる子は夜、皆が寝静まるのを確認したあと茶の間に出てくることがある。ひきこもりの原因は父母による叱責。内面的には放任されている。

18歳になるB君はここ3年ほど学校に行かない。自分の部屋から茶の間へ出ていくことはあるが、祖父や祖母を憎む。彼らの声を聴き、彼らのいる気配を感じると部屋へ戻る。祖父母は彼の嫌なことばかりいうからだ。彼らの声はB君には毒である。彼らの声を聞いた日は1日中落ち込む。兄はかつて同じ問題でひきこもり傾向を示し、妹もひきこもりの兆候を示し始めている。B君は自分から進んでセラピーを受けるといい、母に連れられ私のところへ来るようになった。くる日とこない日をあらかじめ自分で決められない。治療を受け、できるだけ早く学校に行けるようになりたいが、それができない。自分は同年齢の青年達に比べてなんと「ふがいない」のだらうと感じる。彼の為すべきことについて母が指示を出しすぎることを嘆く。

C君は30歳。中学校1年の入学式後1週間学校に行ったあと、不登校。ずっと家にひきこもり、卒業まえ最後の1週間再び学校へ行き卒業した。その後ひきこもりを続けたが、幾分立ち直って定時制高校を卒業。そのあと現在までひきこもり。この間、17年。母と住む。毎年、誕生日の前ころから神経質になり、落ち着かない。最後の誕生日から1年してもまだ家を出られないでいるからである。これはひきこもりの青少年たちに共通。衣食住は配慮されるが、母との心からの接触の経験は少ない。この意味で放任される。

D君はいま27歳、通信高校は終えたが、そのあとひきこもり。統合失調症によりしばらく神経科の閉鎖病棟に滞在。退院していらい今日までもひきこもる。ときどき自転車で外出ができる。公共の乗り物は無理。NPO支援機関の行事にはときどき参加。薬物を常用。その影響でボーッとすることが多く、私への応答は大抵、「そうすか」あるいは「そうすね」と単純。母のお節介りに依存、母からの指示に反抗することはない。

現在16歳のE君は中学のとき体調不良で通学できなくなった。NPO支援機関の学習サポートに通いながら今年の春高校に入った。入学後不登校になるかもしれないという心配があったが、研究所に通うようになってから元気を取り戻し、いまは心配から解放される。犬が好き、話をするのも好き。他の子供たちとゲームをするときは彼らをリードする。小遣いを得るためのアルバイトはできる。母の理想像の押しつけに悩む。

18歳のF子は外出できる。彼女は中学の頃異性からのいじめを経験する。それらいひきこもり傾向を示し、普通高校ではなく、公立高校の通信制に進む。一年次に進む前、準備期間として設けられている準備クラスに1年通う。気分支配されることがあるが、学業を続ける。アルバイトはパン屋での団子作り。母親との共依存。彼女を憎み、四六時中母を苛立たせ、母の反応を伺う。境界を知らない。

最後に、私は25歳のG君の存在を知っているが、彼を見たことはない。手紙による接触のみ。手紙療法は現在、私からの彼への一方通行。これは彼にとって家族以外の他者および世界

と接触する唯一の機会。彼は高校に入っていらい10年間のひきこもり。

簡単にひきこもりの子供たちの様子を述べたが、上記のヨーロッパの国々の青年を特徴づける4つの傾向は私のかかわる子供たちも持つといえよう。

それでは彼らの親御さんは自分たちの息子や娘にどう対応しているだろうか？

A君の母は結婚して30年、嫁ぎ先では居場所を持たないという。嫁として家事その他の勤めを果たすと二階の自分の部屋にひきこもる。そこだけが自分の城。義父の言葉をいじめと理解し、彼の生き方を憎む。夫との会話は乏しい。彼はあと2年で定年。彼は祖父が分家していらい分家の3代目。2代目である彼の父はその息子に農業以外の職業を許さなかった。息子は農業関係の会社に勤務。余暇に農業を行う。彼の父は息子にアイデアを農業の中で実現することを許さなかった。彼はこれを生涯恨む。彼の息子がひきこもる原因は彼自身の中にあることを認める。息子の部屋の中に山積みされたポルノ雑誌を見つけ、そのことで妻と共に息子を叱責したことが原因である。つまり子供の成長を認めようとしなかった。絶対に部屋の中に入るなどの息子の警告を彼らは無視した。息子は深夜皆が寝静まったとき茶の間でコンピュータをいじることがあるが、両親はこの気配を感じても、茶の間に行って彼に話しかけない。息子を乱すことを恐れる。子供たちが独立して家を出ることを不安に思う。

B君の母親は嫁ぎ先の家業を手伝う。義父は地主で不動産経営者。彼とその妻は仕事と家庭の一切を決め、嫁はそれに従う。家族の他の成員もそれに従う。B君の父は10年ほど前勤務する会社で問題があり、彼の母の言葉に従って家族を連れて両親の家に戻った。母親は家に戻ると彼とその家族が食べるものはあるとの約束した。彼は父の家業の一部を引き受けたが、実は仕事らしいことはしていない。彼の妻によると、彼は一日中居間でテレビを見たり、ゲームをしたり、パチンコに行ったり、酒を飲んだり、子どもの模範ではない。妻は夫に不満。夫はひきこもりだと感じ、彼を哀れに思う。義父母から自己中心的な要求は彼女にくる。彼女はプレッシャーに屈する。息子はそのような母を憎み、それが重荷となり学業を放棄せざるを得なかった。息子の母は自分も義父母に耐えるから彼も彼らに耐えなさいといい続けた。母はこれが間違いだったことに気づく。

C君の母は2度結婚し、2度離婚。いまは母の家に帰り、母と一緒に生活。彼女が母親に対して持つ問いは、なぜ彼女が、娘が小さいころ、彼女を一度棄てたのかという問いだった。彼女は療法面接をとおして、なぜ彼女の兄と妹が早くから母を離れて母に寄りつかないか、なぜ自分だけはこれまで母から離れることができなかったかを理解した。彼女が上記の問いへの答えを母から聞きだしたい一心だったからだと分かった。この問いは彼女の心を占領し、他のことは手につかなかった。母は息子が成長し何ごとかを達成したとき彼と一緒に慶ぶことさえできなかった。彼女はこの誤りに気づいた。母の家を離れなければならないと思い、彼女の母に内緒で家を見つけ、引っ越しの荷造りをしている。これに呼応して、息子は研究所の青少年グループに参加するようになった。

D君の母はひきこもりの子供を持つ他の親たちとしか交わらない。これがD君とその妹のひきこもりの原因かもしれないと考える。療法面接の中で彼女が親から愛情をあまり受けなかったことに気づく。長女として親のいうとおりに大家族の面倒をみる仕事だけをやってきたが、これは良くなかったと考える。母から褒められ、労わられた経験がない。他人を助けたがる傾向は、これまで彼女にかけていた賞賛や感謝の言葉を人々から欲しいためなのかもしれないと考える。夫は周期的にうつ状態。会社での地位と仕事が危うくなるかどうかを気にする。

安井：どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

E君の母は1度結婚、そして離婚。母親は派遣社員として2人の息子を育てる。彼女は子供の頃から今日まで見捨てられはしまいかという不安に苦しむ。心理が不安定。本当は理由がないのに人を敵にしたてて、恐れたり、歯向かったりする。客観的に存在しない敵に操られることに気づく。悲観的である。彼女の父と妹と「心理ゲーム」を絶えず行う。母は数年前に逝去。彼女はE君のことを気遣うが、時の経過とともに自分の教育上の基準を彼に押しつけたことは期待過剰になり、彼の重荷になったことを理解しはじめる。

F子の母は自分が男の子でなかったという理由で彼女の両親に拒否された。生涯、自分の性に違和感を持つ。自分を男性のように見せることで親に認められるよう努めた。その間に自分の存在を認めて欲しいという願いは彼女の行動を動機づけるようになる。他人の会話に割り込み、言葉を奪い他の人々が自分に注意を向けるよう仕向けるのがパターンになる。夫は養子、F子にとっても存在感が薄い。母子揃って彼をいじめる傾向を持つ。F子と母は共依存関係。母もF子もこれをうっとうしく感ずるが、依存関係は止まない。

G君の母は息子に対して過保護、ことごとく彼の自発性を摘み取る。これが息子のひきこもりの原因かもしれないことに気づかない。一生懸命ひきこもりについての勉強会を重ねるが、勉強そのものが自己目的化し、何のための勉強か分からなくなっている。息子の面倒を見るよう委託したが、実は彼女自身、子供のひきこもりの現状を肯定している。委託と過保護の矛盾。彼女自身が生涯守られ続け、世の中をあまり知らない。

親たちのひきこもりの子供たちへの対応を叙述したが、過保護が前面に出る場合があり、放任が前面に出る場合がある。機能することの要求もある。相互の境界がない場合もあることが観察される。同一の母あるいは父の中に過保護と放任と／あるいは機能することへの要求という矛盾が見られる場合もある。いずれの場合も厄介だと思いつつも、息子あるいは娘を家におくことについての疑念をもつ親は1人もいない。子供たちが巣立つことによって彼らを失うかもしれないという不安は顕著だった。これは引き合いに出された西洋の国々に比較して自律の人間像が日本においては希薄であることの証明であるように思われる。²⁾

3 母（あるいは父）の問題が子供の問題の中に反映し出される

私はうえに療法面接における証言をもとに子供の母あるいは父自身がどのように自分の母あるいは父から扱われたかに言及した。多くの場合、彼らは私の促しなしに彼らの両親との間のストーリーの1部を話し始めた。彼らの母あるいは父は彼らの成長に伴って増大する自由と責任への欲求を抑えた。自分の意志に従って生き方を選択すること、これまでしたことのないことを試み、それを達成すること、そのために力を尽くすこと。すべてこれらのことは1人の人間が成長することの証拠だが、親たちは彼らにこの意味で成長することを許さなかった、あるいはこの意味で成長することを阻害した。このような挫折経験は次の世代に引き継がれ、母親あるいは父親たちは自分たちの子供に同じ経験を繰り返させた。この点に改めて焦点を当てよう。

ボルノ雑誌を集めたA君の父は息子が性に目覚めることはよいことと思うかわりに、息子を頭ごなしに怒った。母親もこれに加担した。息子が自分に干渉しないでくれと再三母に願ったが、この願いは空しく拒否された。父親が若い頃、そして今日なお父から受けた仕打ちを克服していたなら、彼は息子が性的にも成長すること、自主性を増大させることを理解できたは

ずだった。ところが父は常々彼の若かったころ父が自分の成長を認めなかったことを嘆き、思い出しては不平をいうことが常だった。このことは彼の中に暴力への衝動を維持することに貢献した。その結果、自分が父から受けたのと同じ仕打ちを自分の息子に対して行った。60前後になるいまも彼の父のしたことを根に持ち、この父が息子である自分の人生を駄目にしたと思っている。彼がこのことと和解し、妻の息子への干渉を訂正していたなら、彼の息子のひきこもりはなしで済まされたことと思われる。

B君の母は彼女が義父母の自己中心的な生き方から来る歪みを自分の力によって、自分の世代において克服するかわりに、この歪みの煽りを受けて自ら苦しむ息子にそれを辛抱するよう頼んだ。彼女は一体何処から息子にこのように頼む権利を引き出すのだろうか？母親は義父母の権威主義的要求を退ける強さを持つなら、息子はこの母の強さに助けられて憎しみに蝕まれてひきこもるかわりに前に進むことができただろう。彼女はすでに10年ほど前になくなった母親との関係の問題が処理されていないことに気づいている。

C君の母親は息子を彼女の母との間の葛藤の中に引き込んだ。これは息子の心の中に母を許せないという恒常的な思いを産んだ。これは彼の人生を重くしたが、母が葛藤を整理して彼女自身の母を離れる段階で、彼自身はひきこもりを打ち破って外にでることができた。C君の母は彼女自身の母の生涯を振り返り、自分の母には彼女が生きたようにしか生きることができなかった、そして自分はこの生き方には責任がないとして自分の母を手放したように、彼もまた自分の母を手放すことができたからだった。

D君の母は会話の中で一度ならず彼女の子供たちとの関係に触れる。息子のありのままを見、自然な成長を促すかわりに、それをいまだコントロールし、抑圧するがそれが誤りであることに本当に気づいていない。娘が自然な形で独立することを尊重するかわりに、そうと意識することなしに自分自身の相談相手あるいは補助者として使うことがある。この母親は同時に自分の育った家庭の中でただひたすら親の命令に従って家事を手伝い、親に逆らうことがなかったという。この逆らうという経験の欠如が自分の子供たちの、ひきこもりの遠因になっているのではないかを吟味する仕事が残る。

E君の母は子供の養育において、子供に嫉妬し、子供と競合していることに気づく。これは繰り返し起こる。子供の成長に従って必要なものを与え、子供の興味や企てを支持するかわりに、彼らの幸福を壊したいという衝動に駆られる。「なぜ子供達のためにこれほどのことをしなければならないの？」この背景には彼女自身の内面がつい最近まで絶えず両親にコントロールされそしていじめられ、このことによる傷がまだ彼女の中で癒されていないことと関連があるように思われるが、彼女はいまこの関連をすこしずつ理解し始めている。

F子の母はその存在が自分の両親から肯定されなかった経験をいまだ解決できていない。これは彼女の重荷になっている。これは彼女に生き方を支配する。その結果、彼女は他人の注意を機会があるごとに自分の存在へ向けようとする。これは多くの場合、彼女の行為を動機づけ、彼女の子供たちの心の中に一定の反応である反撃を固定させる。これはエスカレートして子供たち自身の重荷になる。注意を自分自身の成長へ向けるかわりに、学校に行けない。

G君の母は庇護への欲求が満たされなかった。幼稚園の時以後、世界は恐ろしい場所が変わった。不安で一杯の生き方になる。結果、過度に子供をその生活環境から守ることになる。ことごとく子供の自発性の芽を摘む。彼女の自分の両親に対する関係について、さらにまた彼女の夫に対する関係について彼女はまだ話すことができない。

安井：どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

このようにして私は子供の親たち自身経験しなければならなかった親あるいはパートナー関係が、いろいろな形のバリエーションがあるにしろ、彼らの子供への関係の中に繰り返されることを確認した。それゆえ子供のひきこもりを治すためには子供に集中するだけでは、また母あるいは父に集中するだけでは片手落ちであるように思われる。子供たちへの関係の中に、彼らの父母が先立つ世代から受け継いだしがらみは顔をのぞかせることはありそうだと考えなければならない。このしがらみが解決されないまま子供たちの中に蓄積されることはありそうなことである。療法にあたって目の前に座っているひきこもりの子供やその親たちを超える諸世代の生活の流れを考慮に入れる必要がある。もちろんすべてひきこもる子供たちのひきこもりの原因が家族のかなり前の世代の中にあると断定しなければならないというのではなく、いくつかの世代間に起こったことを考慮してはじめて立体的に子供のひきこもりの要因の複合を理解できるということである。A君の父親が自分を、そして彼自身の父親、そしてこの父親の父親との連続の中で理解したとき、彼は彼のひきこもる自分の息子について言った、「そうなんだ、100年の家族の癖が息子のひきこもりという形を取ったのだ」と。すでに見たように彼も彼自身の父が自分にしたことと同じことを息子にしている。しかもこの彼自身の父は避けがたく再びその父の運命を受け継いでいるのである。世代から世代への移行は連続しているようで連続していない。連続していないようでいて連続している。ロゴセラピーを現代的に展開する中で、世代間のこの微妙な関係を探索することの重要性が認識されている。³⁾ この関係の意味を患者に理解させ、この理解を患者の中で習慣になるまで固定すること、そのためのコーチングが必要であること、ロゴセラピーはすべてこれらのことを課題として引き受ける。

4 世の中とのかかわり

ひきこもる子供の親たちは、仕事を持つ人もそうでない人も概して世の中で起こっていることに無関心な傾向を示す。もちろん他のすべての人間と同じように彼らも政治、経済そして社会面での出来事の影響を受けているが、このことに対する批判的感覚が希薄である傾向は目立つ。彼らはどちらかという受容と諦めに慣れているといえる。世の中とのかかわりの意識のみならず、世の中の習慣を超える能力が乏しい。彼ら自身、世の中に出ていけない。母親たちの交際範囲はひきこもりの子供を持つ親たちのサークルを出ない場合が多い。彼女たちは世の中から自分と、自分が快適に属する集団を切り離し、世の中のそとに彼女たち自身が作った仮想の空間の中に浮遊している。子供たちが世の中で生活する仕方とその基礎をなす世の中のルールを指導し、子供を実際に世の中にある存在として認識させ、この認識を活性化できない。いまず彼女たちに必要なことは、自分も他のすべての人間と同様に世の中の一部であるという認識を得ることである。自分が世の中の一部だから的確に世の中のことを処理できるはすであり、子供たちも自分たちも世の中の一部として生きて働くよう定められているのでそれにふさわしく生きて働くことができるという認識を得ることである。親がまずこの認識を自分のものにして、子供に世の中で生きる模範を示す。親が世の中に出て行くことを抜きにしては子供に世の中で生きる模範を示せない。親は親自身の世界を持っている。この世界を広い世の中に向けて開いていく。子供のために自分の世界を世の中へ向けて開くというのではなく、親自身が自分のために、自分の責任を果たすために自分の世界を世の中に向かって開いていく。この意味では親が子供に対して「他者」になる。「他者」として子供に対していい意味で無関心に

なる。子供に向かって「私は君のために自分を世の中へ開いているのだ」とはいわない。これは単純に嘘である。自分が徹底的に自分になる。親が徹底的に自分になることによって、彼あるいは彼女は子供にとって他者になる。この他者になることは、子供に向かって「君は徹底的に君自身になれ」というメッセージとなる。このような仕方では親が自分を世の中へ開くと、子供もまた否応なしに自分を世界へ開き、世界へ出て行く。親が自分を世界へ開く欲求を持てば持つほど、それだけますます子供も自分を世界に開く欲求を持つ。欲求は感染する。子供たちも世の中の他者たちへ自分を開き始める。このプロセスの中で子供は心理的には親を必要としなくなる。親を必要としなくなることは親自身にとっても良いことである。親も子も自分たちは世の中の流れの一部であるという感覚を持つので、生きて働くためのエネルギーを世の中から得る。親にとっても子供にとってもこの感覚が欠けるなら、世の中の流れは両者にとって恐怖と不安と心配の種になる。世の中で生きていくことは重くて仕方なくなる。世の中というものは恐い場所、不安な場所、心配な場所なのだという感覚が体に染みつく。そして親も子も限りなくひきこもる。

世の中には戦争があり、環境破壊があり、交通事故がある。経済も大変、物価も高い。失業があり、汚職があり、騙しあいがある。貧しさと自死と殺人がある。不治の病氣も死もある。われわれの生きている空間は確かに生きやすい場所でない。だからといって世の中から逃げるのではなく、まさにそこにおける人間の営みの状態を見分けること、その一部になることは良いことである。落ち込みや悲しみはあるが、世の中は一刻一刻変わるのだから、棄てたものではない。子供たちにこのことを教える。いろんな物を作る。意味のあること、価値のあることを生み出す。生きることは価値があり、生きる工夫をすることができる。目標を作り、手ごたえを得ることができる。良い人もいる。共に生きることができる。楽しいことは楽しいこととして楽しむことはできる。思いがけないことで幸福な気持ちになれる。生きていることは喜び。子供たちにこれを認識させる。世の中は影と光の両方を含むことを子供たちに教える。このような世の中に触れ、自分がその1部であることを知るので、子供たちがひきこもる、あるいは浮遊する理由はなくなる。

中原恵人と伊藤哲司は不登校・ひきこもり問題を単に子供やその家族の問題としてではなく、「社会・時代の流れ」の一部として捉えるべきだとしたがこれは傾聴すべきである。⁴⁾「社会・時代の流れ」のなかで「家庭・学校」の問題を捉え直し、解決を探す。それと同時に同じ「社会・時代の流れ」は「工場・産業」を生み、それは「公害問題」へ通ずることも子供たちに理解させる。この二重の意味で「社会・時代の流れ」を指摘することは重要である。このような中原らの考えを引用した上で私はもう1つの考えを加えたいと思う。すなわち「社会・時代の流れ」は原則的にも、事実にしても「公害問題」以上の積極的なものを含み、これと同じ「社会・時代の流れ」は原則的にも、事実にしても「不登校・ひきこもり問題」以上の積極的なものを産むということである。

ロゴセラピーそして実存分析は徹底的楽天主義のチャンピオンである。それによると「世の中」は、人間が生命の意味を意志することに対応して無限に実現可能な意味を提供する場所である。人間は自分の中にひきこもることによって意味を実現するのではない。人間はその都度の自分の状況に従って世の中が提供する意味の可能性を見出し、それを実現する。このようにして人間は人間性心理療法のいわゆる自己実現の限界を超える。人間は意味実現の場としての世の中を通らなければ自己を実現できない。自己実現は必ず世界を通ってのことである。この

安井：どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

ようにロゴセラピーと実存分析は自己実現の可能のための回路を問題にする。ヴィクトール・フランクルはこのこととの関連で「世界－内－存在」という初期のマルティン・ハイデッガー（1889～1976）の概念を使うこともあった。しかし、彼はビンスワンガーやボスにおけるとは異なって、ハイデッガーの用語に改変を加えた。ハイデッガーにおいて「世界－内－存在」は心配と不安につきまとわれ、すべての情緒は死と不安へ還元されるが、フランクルにおいては世の中の存在としての人間は生命の意味を発見する希望に満ちている。彼はこの点でハイデッガーよりもむしろ、希望の形而上学を書いたガブリエル・マルセル（1889～1973）に近い。この実存主義哲学者は人間存在の限界を超えてそれを担う根源的な何ものかへの信頼を語り続けた。人間はマルセルによるとこの信頼において揺ぎない希望を持つとした。人間は限界的な状況においても「どうにかなる」ことを知っている、したたかになれるとした。ひきこもり問題を教育の問題と考えるなら、教育学者のオットー・フリートリッヒ・ボルノウ（1903～1991）を引き合いに出すこともできる。彼もまた絶対の「庇護」を語り、マルセル同様、期待とは区別される希望を知っている。期待において人は「期待されている出来事に向かって動く」が、希望においては逆に、「出来事が自分の方に向かって来るにまかせる」。このことは最近明らかになってきているが⁵⁾、これはフランクルと軌を一にする理解である。彼によると世の中の存在である人間は物を生み出したり、すでにあるものを体験したりすることにおいてのみならず、変えることのできない運命を担って苦悩することにおいてさえも希望を失わない。苦悩することも意味可能性の実現だからである。

5 支援団体および学校とのかわり — 親の視点から

私が療法面接した母親たちはすべて子供たちがひきこもり、学校に行かなくなったとき、ひきこもりの子供たちを預かるNPO支援団体を頼った。それはひきこもりの子供たちを収容して生活させたり、学習意欲のある子供たちには上級学校への進学を目指した学習をサポートしたり、親たちに勉強会を組織して学習の機会を与えている。彼らが頼った支援団体は10年以上の歴史を持ち、行政の支持を得て急速に規模を拡大している。私の研究所にくる母親たちの3人は今日もこの支援団体との関係を維持する。その中の1人はこの支援団体の限界を感じてはいる。それは子供がひきこもり・不登校になったとき動揺する母親を受け入れる仕方を心得てはいるが、原因を究明し解決の道筋を示すことができないでいるという。ただ彼女は息子のためにこの団体を利用しているので、それとの関係を持続しているという。この支援団体への所属を継続する他の2人の母親はそれが子供の保護欲求を満たすという。他の4人の母親たちはこの団体への所属を解消している。私がこの団体を学び知ったのは、それに所属する会で親の自立に関する講演をしたことがキッカケだった。それまで彼女たちは子供たちのひきこもりの原因は問う必要はないと教えられていて、母親たちの1部は果たしてそうなのかという疑問を得た。彼女たちはひきこもりの子供に対する母親の影響は無視できず、親の自立問題に注目していた。このこととの関連で、自立のためには自分自身の母親との関係を整理する必要があるという私の話に興味を持ったらしい。彼女たちが研究所に来るようになっていらい自分たち自身の母親関係を繰り返しテーマにし始めたことはすでに指摘した。彼女たちは彼女たちが属していた支援団体はその事業の拡大に伴い、ひきこもりの子供たちと彼らの親たちの悩みに向かえないでいると語る。そこでは親たちは集まって勉強し親睦を深めるのだが、ひきこもりの

子供を持つ親は自分だけではないのだとおもって安心するというのである。子供たちの回復という目的そのものは第二のこととなり、親たちは世の中から自分たちを分離し、仮想空間のなかで浮遊を続ける。本来の課題を解けないまま自らを閉ざす巨大なひきこもりファミリーとなっているという。この点は難しい問題であるが、これは研究所に集まる親たちの支援団体に対する批判となっている。

仙台市内のある公立学校は通信制を提供している。そこではひきこもりの子供たちのために特殊な形においてではあるが、高校卒業資格が与えられる。研究所にくる母親たちの一部はこの通信制にも連なる。私はそこでも講演し、その機会に校長と、不登校・ひきこもりの子供たちのための複数の教員と話す機会を得られた。これに引き続き、ひきこもりを克服して社会に出る努力をする学生のための東北北海道地区弁論大会を訪れる機会にも恵まれた。通信制を使う子供たちの親たちはそれをよい助けとして評価することが理解される。とくに不登校・ひきこもりの子供と接するなかで教師たちが教師中心の教育から不登校・ひきこもりの生徒中心の教育へと発想を転換するプロセスにあるのだということを感じた。この学校においてのみならず他の学校においても教師たちが生徒や保護者にたいして自分の考えを押しつけないで、むしろ慎重に彼らから話を聞くことに努めていることは評価に値しよう。教師が硬直した「かまえ」から抜け出して、自然な「かまえ」に変わることができるかどうか⁶⁾、これは学校における不登校・ひきこもり問題の解決のための基盤になると私自身も思う。

研究所に来る親たち自身もこの「かまえ」の変換の必要を知っている。例えば私は親たちとの会話を思い出す。何人かのひきこもりの子供たちが親を殺すという事件が連続したことがあった。研究所に来る親たちはいった、大人たちは「命の尊さ」という考えを不登校・ひきこもりの子供たちの理解できる言葉で包んであげなければならない、と。諸々の事件があったとき、文部科学省担当大臣が青少年たちに「命の尊さ」についての言葉を向けたが、親たちはこの言葉はひきこもりの子供たちに届かなかったかもしれないと考えたというのである。例えばすでに見たように、B君は祖父も祖母も嫌う。彼らはことごとくB君の前に立ちはだかり、彼が建てようとするすべてを壊すように思われるからだ。家の中のどこかに祖父の気配を感じると、彼の心身は憎しみの塊になる。「あの人はなんで生きてなんかいるのだろうか？」と。B君は気を取り直し、自分は祖父と血がつながっているから彼を殺せないと考える。この子供が血縁は彼を殺さない充分な理由にならないと考えるようになったら、何が起きるだろうか？血縁は決定的な関係だと誰が保障できるか？殺気を掻き立てる祖父母の振る舞いは止め処なく続く。彼らは孫の気を引くためのトリックをいくつも考え出す。例えば「自分のいうとおりにしたら、山ひとつ君にあげる」という言葉。所有関係に支配された生き方の息苦しさ！それだけでいつ殺人がおこるかわからない。それに悩む子供たちにどのようにしたら「命が尊い」という考えが伝達可能になるのだろうか？この言葉が届かない子供たちはいたるところにいて、われわれは彼らの存在に気づかない。学校や教育行政がその期待する人間像の本物であるかどうかを計る基準は、それが憎しみに心身を食い尽くされそうになっている子供に届く言葉に翻訳されているかどうかの中にあるだろう。これが母親たちの反応だった。

子供たちは何ができるようになったらひきこもりを克服したことになるのだろうか？目標は子供の様子に従って異なる。四六時中自分の部屋にひきこもり、最小限度風呂やトイレに行くため部屋を出るにしても、家族の誰かあるいはすべての成員に顔を見られ、話しかけられたくない子供がいる。そのような子供にとって茶の間に出てくるだけで大変なこと。それができるよ

安井：どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

うなったら療法の一区切りになろう。一見小さいことの中に大きな変化が露呈される。家から外に出るだけ、また公共の交通手段を使えるだけでも一つの到達点でありえる。ひきこもりが学校とかかわっているばあい、校門をくぐれる、廊下を歩ける、教室に入れる、他の子供たちと話せる、これらのことだけでも到達点となる。そのために学校そのものが魅力を回復する。学校は地域と協力する。心理療法家はきめこまかい技術を使いながら、心には独自の法則があることを学校と社会に周知させる。ひきこもりの子供がすでに学校を終わっているばあい、労働が、そして世の中が青少年にとって苦痛と恐怖と不安と心配ではなく、むしろ実現しえる意味可能性の詰まった場所、魅力の空間であることを彼らに示し続ける。

6 どうようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

簡潔さを期して上述の青少年の中から3名の態度変容のために採用された面接技法を紹介しよう。1つは「根源との和解」、もう1つは「過去は過去でない」、最後の1つは「1人のために全員集合」である。2番目と3番目は私自身が考案し名づけた技法である。

C君がひきこもりを止めて研究所に来るようになったのは、彼の母の変化と関連している。彼女は彼女が生涯こだわった母との関係という問題を解くことができたからである。C君の母との面接から分かったのは、C君の祖母はC君の母を棄てた。後者はなぜ前者がそのようなことをしたのかと問うた。この問いへの答えを得るため今日にいたるまで彼女の母のそばを離れることはできなかった。一連の面接のあと、C君の母はこの問いそのものと決別することに決めた。彼女はこの問いを手放す用意ができたからだった。その時彼女が対決した論理はこうだ。「母はあなたを棄てた。彼女が娘を棄てたことはむごいことだったが、母がそうするには彼女自身の宿命があった。彼女のむごい行為は彼女の宿命の結果である。あなたが悪かったのではない。他方、娘であるあなたがこの出来事に固執し、40年以上も『なぜ母は自分をすてたのか？』を問い続けたは当然過ぎるほど当然だったのだが、その間あなたは答えを得るために空しく母に密着し続けたにすぎなかった。こうすることは娘には確かに必要だった。しかし、それが正当であり、必要な時はいもう終わった。これまでの態度を手放す時がきている。あなたは母との負のかかわりを解き、新しく生き始めることに異存があるか？」こう私が尋ねると、彼女は「これに異存はない」というところまできた。母が娘を棄てたのは娘のせいではなかった。娘は自分が棄てられたことに何もできなかった。それはそれでよい。もはやいまは当時の母の仕打ちを気せず生きられる。彼女は新しく生きるため母の家から引っ越すことにした。このように以前の生き方の限界を理解して、それまでとは違った生き方をすることに決めることをロゴセラピーでは「根源との和解」⁷⁾という。

この母との「和解」が起こり、彼女が引っ越しの荷造りを始めることに前後して、息子のひきこもりは止み、彼は外に出、車で1時間半の道のりを飛ばして、研究所の青年の集まりに加わった。このようにして息子の態度変容は母の態度変容に対応すると理解される。息子の母は彼女自身の母について彼女だけの物語があり、彼女の生き方以外の生き方を選択することは不可能だったこと、同じようにこの母の娘自身にも自分だけの物語があることを洞察した。そのことに責任を負い、自分だけが実現できる意味を自分の意味として生きる以外にはない。彼女はこのことを認識した。彼女の母の家からの引っ越しはこの認識の表現だった。これが息子のひきこもりに終止符を打たせた。彼は母を許せなかったことを核として形成したひきこもりと

いう生き方に固執する必要はもはやなくなった。これまでの母への態度を自分の誇りとして維持することはできず、いまや違った態度を取らざるを得ない。この息子において起こった「根源との和解」は母において起こった「根源との和解」の写しであると理解される。

B君の祖父に対する憎しみがますます強くなったことは上に書いた。「彼を殺すか、自殺するか、解決を見つけるか、この3つに1つしか道がない」面接のために私のところへ来たいが、その日、その時になると動きが取れない。母親は息子が是非とも私のところへいくよう説得するが、それがまた息子のプレッシャーになる。それによって息子が動けなくなる。これは悪循環。ある日、どうにか母と息子は一緒に面接のために研究所にいくことができた。B君は3年間ひきこもってきたのは自分の生き方として自分が選んだ道であるという。一生懸命ひきこもりを続けてきた。いまそれを止めたらひきこもりを続けてきたという誇りを失うことになる。これはできない。彼が祖父母を憎むようになったのは、彼らが彼のひきこもりを責め、学校に行くように強いるからだだった。彼らを憎まないようになれば、ひきこもり以外の生き方を認めることになり、これまで大事にしてきた誇りも棄てることになる。これは無理な相談だという。私はこの論理を溶解することに成功した。私の論理はこうだ。「君はひきこもりから出てくることによって君の3年間の生き方を失うのではない。この3年は過去になるが、それは単純に失われるのではない。むしろ、過去という君の存在の中に確実に保存されるのだ。自分の愛する母親、兄、そして妹の記憶の中にも保存される。これも君にとってプラスだ。君はこれまでひきこもりを必要としたが、いまはもう必要としない。君がそれを必要とするときは終わった。これからは必要としないということは君にとっていいことだと分かっている。このように君は君の過去と和解したのだ。いま君の人生の、次の段階が来るのだ」と。重要なことは「ひきこもってはいけない」ということではない。B君は「ひきこもる必要がない」ことを洞察した。これは上記のC君と彼の母の場合と同じだが、B君の場合は、和解に先立って試さなければならなかったことがあった。それは変わることは過去の喪失であるという観念を訂正することだった。ところがある生き方が過去になるということはそれが失われることではなく、むしろ過去という存在の中へと保存されること、そしてそれがそこからこれからの生き方のための資源として現在へと流入すること、これをB君は理解した。これは彼の態度変容にとって決定的なことだった。この意味ではこれは私が「過去は過去でない」⁸⁾と名づける独立した技法である。いまはこの青年とは学校へ戻るための準備に差し掛かり、療法としてはコーチングの段階である。

10年間ひきこもっていたA君の両親への提案は、家族と地域の人々と一定の戦術を立てながら子供を部屋から出すことだった。私は彼らをコーチする。家族とともに以下のことを企てた。

父親は1週間に何度か決まった時刻に20分間⁹⁾、息子に世の中の話をしてもらう。家族のこと、彼らの住む町のこと、世の中で起きていることを話す。これまでの息子への関係はテーマにしない。さらに世の中で起きている悪よりも善のほうを多く話す。だいたい3分の2は良いこと、悪いことは精々3分の1程度。良いことは常に量において悪いことを凌駕するよう気を配る。20分話したらやめる。次の声掛けに期待を持たせるためである。声掛けは背骨を伸ばして生き生きとした気持ちで行う。ひきこもっている子は背を曲げて元気がないので、その子に背骨を真っ直ぐにする機会を与えるためである。声は発声する者の姿勢も運ぶ。姿勢は人格であり、他の人格の心身の歪みを正す¹⁰⁾。

母親にはA君に食事を部屋のドアの前に置くとき、毎回、知恵の格言も届けるよう提示した。

安井：どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？

考えの詰まった格言を見つけ、それを綺麗に小さな細長い紙に書き写す。A君に考える材料を与えることが狙いである。これは単純な形においてではあるが、この子の過去10年間の学習の欠如を補うことになる。¹¹⁾

A君の兄は毎夕仕事から帰ったら、「〇〇君、帰ってきたぞ、元気にしているか？」と声掛けする。兄はこれまでA君と仲が良かったわけではないが、これを喜んでしてくれる。¹²⁾

家族が子供の対応を確認したあと、この子の両親は子供のことを良く知る地域の誰かを連れてくる。¹³⁾ 家族と一緒にA君の部屋の前で世の中には鬼ばかりではないことをワイワイ話してもらう。地域の誰かは将来がA君を待っていることを話す。

私はA君に月に1回手紙を書く。¹⁴⁾ 彼を青年たちの集まりに招くためである。彼らが将棋やトランプ遊びをし、世の中は恐ろしい場所でないといっていること。生きることは喜び、そして楽しみであるといっていることを伝えている。A君は苦しい思いをしている。きっかけがあったら出てきたいと思っているに違いない。私のさらなる戦術は、必要であれば研究所に来る青少年たちがA君の家を訪れること。¹⁵⁾ いつか必要であれば私自身が彼のひきこもる部屋の前から語りかけることを計画している。¹⁶⁾ 肝要なことは家族ばかりではなく、地域の知り合いその他の他人もA君に興味を持ち、彼のために動いていること、彼を心配していることを示すことである。

すでに変化の兆しを見ることができ。父親はA君の立てる音がいつもと変わりつつあり、稀には誰にも見られる場所に現われ始めたという。見られたいという願望が彼の中に生まれ、この願望を実現するにふさわしい場所に現われはじめた。¹⁷⁾ 息子自身、これまでのひきこもりは、これからの人生の段階のために役に立たないことを認識していることが推察される。ひきこもる彼自身は彼の父母以上に苦しいはずだ。このような生活は何処まで続くかという不安。¹⁸⁾ 私は略述した技法を「1人のために全員集合」と名づける。これは「君の戻る世の中は君が考えるほど悪くはないのだ」と大勢が揃ってA君に理解させ、彼を勇気づけるために考案された。A君はこれを理解した段階で世の中に出てこざるを得ない。彼自身もこの変容を阻止できない。世の中には実現可能な意味の発見が待っている。そこには希望がある。

7 結び

うえにロゴセラピーを不登校・ひきこもり問題に適用しながら、青少年を世の中に復帰させるための3つの相互に関連する技法を素描した。それは逆説的な言い方だが、同時にひきこもりという「負の現象」にも場所を与えること、そのことによってそれを個人的にも社会的にも資源に転化することでもあった。克服され毒を抜かれた「負」の現象はその後「正」の現象が現われるための資源として働くことができる。

フランク没後11年、もともと精神医学のために開発されたロゴセラピーの適用範囲は拡大され、方法にも工夫が凝らされてきた。日本的形態の不登校・ひきこもりは例えばこの論文の著者が働いた経験のあるドイツ国の学校では質的にも量的にも考えられない現象である。不登校・ひきこもり問題はこの意味でなにより私自身にとってショックだった。まことに日本人の生活の建て方における最先端の弱点がどっと噴出したような現象であるように思われる。上記の技法の開発はロゴセラピー&実存分析研究所・仙台をフィールドとして、ロゴセラピーを学校教育、教育行政、家族関係および人格形成のための心理療法として適用した成果である。

仙台市の他の地域の市町村でも大小さまざまな心理療法の試みがなされていると聞く。ロゴセラピーからの貢献事例を蓄積し、それを提供することは望ましいことと思う。¹⁹⁾

注

- 1) Jörg Riemeyer, Die Logotherapie Viktor Frankls und ihre Weiterentwicklungen, 2007 Bern, S.362-S.367
- 2) これについて例えば、斉藤環、ひきこもりはなぜ「治る」のか？ 2007 年 株式会社太洋社、25 頁
- 3) 例えばロゴセラピーを家庭教育に適用して成果を収めるボグルルカ・ハデインガー博士の場合。注 19) に挙げられている彼女の書を参照
- 4) 中原恵人／伊藤哲司、これほどまでに不登校・ひきこもりを生み出す社会とは何なのか？ 2008 年 北大路書房、5 頁～10 頁
- 5) 広岡義之、フランク教育学への招待、2008 年 風間書房、338 頁～341 頁
- 6) 鈴木誠、学校現場からの不登校についての再考、臨床心理学 Vol.5 No.1 (2005.1.) 金剛出版、39 頁～45 頁、42 頁
- 7) Boglarka Hadinger, Methoden zur Einstellungsänderung, in: Wolfram Kurz u. Boglarka Hadinger, "Sinnvoll leben lernen", 1999 Tübingen/Wien, S.43-S.79, S.66-S.69
- 8) フランクは、過去は過ぎ去ってもうないという状態ではなく、むしろ過去という確実な存在であるのだといった。それは人間に現在の人間に自己同一性を与え、将来に向かって資源となりえるものの貯蔵庫である。
- 9) 次回の話に期待させるためには、1 回の話は長くて 20 分。
- 10) Ingrid Amon, Die Macht der Stimme. Persönlichkeit durch Klang, Volumen und Dynamik, 2007 Heidelberg, S.24-S.26
- 11) 食事を運ぶことはコミュニケーションの機会である。それは犬に餌を与える行為とは質的に異なる。いや、犬にだって愛情込めた挨拶をするではないか。母親は食事を運ぶという行為の意味をよく理解できないようだった。どのような格言あるいは言葉を選ぶかを理解することも非常に努力を必要とした。母親は彼女の選んだ格言あるいは言葉を通して「もっと母のことを考えて欲しい」というアピールを送ることが多かった。実はそのような母親の自己中心性が子供を苦しめ、ひきこもりに追いやったのである。この意味で母親にとって今が正念場であろう。
- 12) 兄は自分の役割を理解するため、両親に連れられて研究所まで足を運んだ。これは彼に新鮮な感動を与えたようだった。弟のために何かをする課題は彼に何かを考えさせたようだ。
- 13) ひきこもり問題を解決する鍵の 1 つは他者、すなわち家族以外の人間が介入すること。
- 14) 手紙の内容は主として研究所における若者達の集まりへの招待。集まりでは遊びや語りが待っているという内容。
- 15) 私が子供をひきこもりから解放するよう委託されるまえ、2 人のカウンセラーが委託を受けたが、彼らは最初からひきこもりの部屋の前で語りかける方法を取った。これも 1 つの方法ではあるが、家族はキーパーソンの役割を果たすのだから、まず彼ら自身が語りかける。私はすべてを組織する者として必要であれば最後に語りかけることにした。
- 16) ひきこもり問題の解決のために地域の人々が参加することが重要であるという認識はいま日本においても広まりつつある。このことによって地域も健康になる。
- 17) これはひきこもりの子供の父が面接のとき喜びとともに伝えてくれたことである。
- 18) 奇妙なことにこの意味の不安を想定することは子供の家族も、子供の知り合いにも少ない。しかし、子供が部屋から出てくるための仕事においてこの不安を理解し、それを前提とすることは子供自身のためにも、ひきこもり解決の技法開発にとっても重要である。
- 19) 永島聡、スクールカウンセリングとフランク、山田邦男（編）、フランクを学ぶ人のために、2003 年 世界思想社、62 頁～85 頁。そこで彼は学校現場における精神、自由、責任というキーワードに導かれたカウンセリング事例を 3 つ挙げている。中学男子の母親、高 1 男性生徒本人と母親、中学女子生徒本人を対象としたものだが、これは貴重な考察を提供している。本論文における私の事例は学校の外、家庭の中における療法事例である。ロゴセラピーの家庭教育の指南書は今日のところほとんど皆無だが、ボルグルカ・ハデインガー著（安井猛訳）、生きることへ勇気づける、2008 年 日本教育振興センターはロゴセラピーの家庭教育に興味を持つ者に刺激を与える。ひきこもり問題解決のための技法を開発しようとする者にとってはヒントに充ちている。